

今日のポイント

- ・ 原罪によって人と神との関係は断たれたのでしょうか。
- ・ 神は不公平なのでしょうか。
- ・ 罪や信仰は遺伝するのでしょうか。

【第 2 年の進め方】

「一年 12 回で聖書を読む会」の第 2 年が始まります。第 1 年に続いてのご参加を歓迎いたします。第 1 年の終わりに行いましたアンケートの結果、第 2 年は(1)旧約聖書と新約聖書から、第 1 年目にとりあげなかった箇所を選び、(2)旧約聖書に 5 回、新約聖書に 7 回を割り当て、(3)機会ある毎に、世界史との関わりにも言及するという方針で実施することにしました。今日はその第 1 回。「カインとアベル」です。まず、創世記 4 章を朗読していただきましょう。

【罪という下向きのうず巻き】

少しだけ復習です。創世記 3 章では、人類が最初の罪を犯しました。神のようになりたいという誘惑に屈しました。人は神に依存して生きるように造られています。神を信頼し、神に従っているときにだけ、幸せになることができる存在です。ところが人は、神との愛の関係を損なってでも、自分を主張することを選んでしまいました。これが原罪と呼ばれる最初の罪。つまり、すべての罪のプロトタイプ（原型）のような罪だったのです。

罪がもっている問題は、神との関係を損なうことです。罪による神との関係の損壊は下向きのうず巻きのようなものです。罪が神との関係を損ねると共に、神との関係が損なわれるほどに罪はその度合いを増していくのです。この下向きのうず巻きは、一人の人の中で起こると同時に、他の人との関わりの中でも起こります。創世記 3 章では、夫婦の間でこの下向きのうず巻きが働きました。世界で最初の夫婦はたがいに相手を犠牲にして、自分だけは神の怒りを逃れようとし、その結果ますます神との関係を損ねて神から離れていくことになったのでした。罪とはまず神との関係に関わるものであることを、ここでもう一度確認しておきましょう。

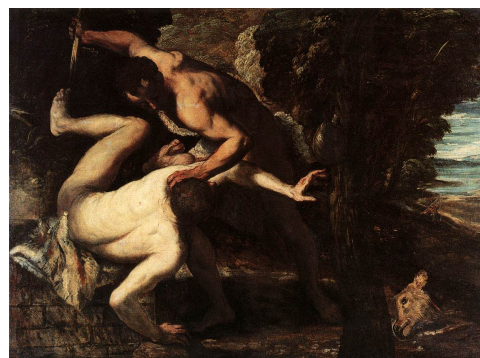
【あわれみの神】

人と神との関係は損なわれてしまったと言いましたが、それは関係が断たれてしまったというわけではありません。人の側では、「もう神などいない」と思

ったのですが、それにもかかわらず人と神との関係は断たれることがあります。それはひとえに神のあわれみのおかげです。神と断絶するならば、人は存在することができません。すべてのいのちやエネルギーの源は神だからです。神は罪ある人をあわれみ、関係を保ち続けます。そして、損なわれた関係を少しでも回復するように、人に語りかけ続けます。この神のあわれみは変わることはありません。それは人がますます下向きのうず巻きに入りこんでいくときにもそうなのです。

【史上最初の殺人事件】

神との関係が損なわれたこの夫婦に二人のむすこ、カインとアベルが生まれます。人がまだ罪を犯さなかったとき与えられた「生めよ。ふえよ。地を満たせ」（創世記 1:28）という神の祝福は、神のあわれみによってまだ有効だったのです。この子どもたちには大きなチャンスがありました。神を信頼し、神を愛し、たがいを愛し合って生きるチャンスがあったのです。弟のアベルについては記事が少ないのですが、カインについては、次のとおりいくつかのたいせつなことが記されています。



ティントレット作
アベルの殺害

- (1) 神に愛されていることが十分にわからない人は、他者に対する優越によって自分の存在価値を証明しようとする。造られただけでまだ何もしていない人を神が見たとき、「非常に良かった」（創世記 1:31）と記されているのもかわらず。
- (2) 他者との競争に敗れたとき、人は劣等感、怒り、ねたみといった感情のとりこになる。「だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた」（4:5）。その結果、自分が否定されたと感じると、人は自分の存在価値の証明のためには、他人を排除することも厭わなくなる。「しかし、カインは弟アベルに話しかけた。『野に行こうではないか。』そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した」（4:8）。そして、ますます人は神から遠ざかっていく。「【主】はカインに、『あなたの弟アベルは、どこにいるのか』と問われた。カインは答えた。『知りません。私は、自分の弟の番人なのではないか。』」（4:9）の部分はこのことを表している。
- (3) 罪を犯す瞬間にも神は語りかけている。「ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである」（4:7）。これは罪から離れるようにと呼ぶ神の声である。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているの

か」(4:6)は罪を治めるための唯一の方法を教えている。顔を上げて、神を見上げて、神に近づくことがそれ。神との関係だけが私たちが罪から守ることができる。

- (4) 「あなたは、それを治めるべきである」(4:7)と神が言う以上、カインは神の助けによって、そうすることが可能である。原罪(罪の原型)はカインが正しい選択を行う能力を損なってはいるが、完全に奪い取ってはいない。
- (5) カインが罪を犯した後も、神はカインを見捨てないで守っている。神は罪人を見捨てないでどこまでも寄り添い続ける。「【主】は彼に仰せられた。『それだから、だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける。』そこで【主】は、彼に出会う者が、だれも彼を殺すことのないように、カインに一つのしるしを下さった」(4:15)とある。

【カインとセツ】

放浪するカインにも「生めよ。ふえよ。地を満たせ。」という神の祝福は注がれ、子孫が誕生していきます。一方、アベルを失い、カインも失ったアダムとエバにもう一人の男の子、セツが生まれました。セツの子エノシュが生まれたとき、「人々は【主】の御名によって祈ることを始めた」(4:26)とあります。セツの家系は信仰の家系と見ることができます。対照的にカインの家系は、強く豊かになっていくのですが、不信仰の家系として描かれているようです。特にカインから数えて6代目にあたるレメクという人は力ある人であったようですが、それまでのだれよりも悪に傾斜しているように見えます。彼は「カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍」(4:24)と、神を神とも思わない傲慢な不信仰があからさまです。また、「私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した。」(4:23)と言うなど、「神のかたち」に造られた人間の尊厳を顧みず、殺人をも是とする傲慢な自己中心性の極まりが見られます。ふたりの妻をめとったことも、神のみこころにそむくことでした。

けれども、信仰の血統や罪人の血筋といったものがあるわけではありません。罪も信仰も遺伝するものではありません。かといって人は一人で生きているわけでもありません。神との愛し合う関係に生きる信仰者はまわりの人にもよい影響を与えます。まわりの方はその人によって愛されることを体験します。そして信仰者は神と人を愛して共に生きる生き方のよきモデルともなります。上向きのうず巻きです。反対に、不信仰な人はまわりの人々にも負の影響を与えます。怒りやねたみの感情の再生産を促してしまうのです。下向きのうず巻きです。

私たちは、善と悪の混在するこの世界に生まれてきます。その中で神の語り

かけを聞くと同時に、自分中心な傲慢な生き方への誘いの声も聞いています。よき人生を選択するためには、個人として神の助けを受け入れ、正しい決断をすることが必要です。それと同時に神に向かう上向きのうず巻きとして感化しあう人々の交わりに身を置き、愛され受け入れられることを経験することが必要なのです。

コラム1 神は不公平なのか。

なぜ神はアベルのささげ物に目を留め、カインのささげ物に目を留めなかったのか。これは不公平ではないか。カインが怒るのも当然ではないか。これは多くの人を悩ませてきた疑問です。ある人々はカインのささげ物にはアベルに比べて劣るところがあったにちがいないと考え、それを見つけ出そうとしてきました。他の人々は神が定められた運命だから受け入れるしかないのだとして納得しようとしてきました。

しかし考えてみれば、この世界に生きる人はみなそれぞれ異なる環境や個性に生まれつきます。みなが全く同じというような平等は存在しないのです。神が求めるのは、そのように異なる一人ひとりが、それぞれに対する神の呼びかけに応じて生きることです。聖書が物語ろうとしているのは、神がなぜカインとアベルに異なる扱いをしたのかではありません。ささげ物を受け入れられないというできごとの中でもカインに語り続ける神。その語りかけに心を開いて応答するなら、カインは神との関係をよりよいものにすることができました。神はカインにはそのように働きかけるのが最善であったことを知っていました。神は一人ひとりと規格に従った大量生産ではない、オーダーメイドの関係を望みます。私たちがそれぞれ異なる環境とできごとの中におかれているのは、そのためなのです。

コラム2 カインの妻はどこから来たのか

カインは妻をめとり、子をもうけます。この妻はどこから来たのでしょうか。アダムとエバから生まれた女の子だとするなら、カインと妻は兄妹もしくは姉弟ということになってしまいます。これは聖書ではよしとされていない結婚です。あるいは、神はアダムとエバ以外にも人間を創造していたのでしょうか。

いろいろな仮説は可能ですが、聖書に書かれていないので結論はでそうにありません。やはりここでもたいせつな **how**(どうやって)ではなく **why** (なぜ) です。神は罪を犯したカインにも妻を与え、子を与えました。カインにも家庭が必要であることを知っていたのです。それは、神がカインをあわれみ、惜しんだからでした。カインの妻の名が記させていないことも、私たちの詮索をとどめるサインのように感じられます。